

ダルエスサラームの 人々の暮らし

古沢紘造

ダルエスサラームのインド人経営の店をのぞくと時計、カメラ、ラジオ、テレビ、ステレオなど、自由化以前にはほとんど目にすることがなかった外国製品がずらりと並んでいる。品数も増え客の出入りも多く、商売に活気が感じられる。タンザニアの経済状況から考えれば贅沢と思えるほど蛍光灯を煌々とつけ、店内は眩しすぎるくらいだ。値段を調べてやろうと思うのだが、一挙手一投足を照らし出されているようで落ち着かない。椰子林の美しい海岸に面して立つオイスター・ベイ・ホテルには外国人相手の食料品店ができ、パン、バター、チーズ、ハム、ソーセージ、ベーコン、生肉、罐詰類、ビスケット、ワインなど、ホームパーティーをすぐにも開けそうなほどの賑やかさだ。

ウガンダのアミン軍との戦いで外貨を使い果し、経済がどん底にあった1979年から81年にダルエスに暮し、

食料品買出しに明け暮れた者には信じられない光景だ。あの頃はパンも米もない、砂糖がない、ミルクもない、バターもない、ともかくないものづくしだった。入港するため沖待ちしている外国船が物資補給船のように見え、船影が少なくなると不安になったりしたものだ。援助米として送られてきた日本の古々米をスーパーで買いこみ、ストックしておいたのを穀象虫に食いつくされ、それでも蚊帳を篩がわりにして粉と虫をよけて食べたのが嘘のようだ。

ILOのダルエス事務所のタンザニア人司書Aの家に遊びに行く途中、小屋掛けの店が軒を並べるキノンドニ・マーケットの傍を車で通ったが、かつてはなかったスポーツシューズ、ワイシャツ、ズボン、布地などが大量に売られているのが目をひいた。ワイシャツ、ズボンはカナダ、アメリカ、スウェーデン、台湾などから輸入された古着だが、デザインが良

く、値段も安いので人気があると言う。Aの部屋には真新しい蚊帳が吊るされていた。広げると四角錐の形になるコンパクトタイプだ。調査協力の報酬として私から受け取った謝礼で、記念になるものを買おうと思った、と言って私を喜ばせる。昔、このタイプを手に入れようとしたことがあるが、ナイロビでなければ入手できない、と諦めた。十年前には想像もできない盛況ぶりだ。地方からやってきた協力隊員は、以前のようにダルエスでタバコ、ビールなどを買いこむ必要もないほど地方にも物が出回っていると話す。

物が豊富になったのは確かだが、人々の暮らしは実際のところどうなのだろうか、それが現地調査で一番知りたいことだった。ジェトロ事務所のインド人秘書Kは、去年まで1キロ50シリングだった砂糖が、今(89年9月)は100シリング、倍にはね上がった、と言って嘆いた。日本人にとっては虫歯が疼くような、と表現したいほど甘いミルクティーを好むタンザニア人にとって、これはつらいことだろう。砂糖だけではなく、何からなにまで大幅に値上りし、家計は圧迫されている。政府発表では



88年のインフレ率は31%だが、人々の実感はこれをはるかに上回るだろう。品物を眺めるばかりで手が出せない、高すぎるのだ、という具合に不満はつのる一方だ。自転車1台2万5000シリング、これは最低賃金2075シリングの12カ月分に相当する。平均賃金は最低賃金にはりついているのが実情だから、多くの庶民には必需品の自転車すら高嶺の花だ。

人々は厳しい経済状況の中でなんとか現金を手に入れようともがいている。主婦はマンガジ(揚げパン)、ムシカキ(焼肉)、ゆで卵、アイスクリームを売る、若者は商店主から手渡されたカバン、バッグ、ベルト、ベッド・シーツ、衣服を売り歩く、大学職員は学生のレポートのタイプを請け負う、学校の先生は受験生の家庭教師をするなど、現金収入を得るのに夢中だ。こうしたサイドビジネスの収入が正規の給与をはるかに上回るケースも多くなっている。モロゴロではマンガジ、ムシカキ売りのおばさんが大学教員よりも稼いでいる、と言ってソコイネ大学の若い教員は苦笑した。

ダルエスからほんの20分ほどのム

コンガで養鶏場を営んでいる友人Eは、近所の小売人に卵を1クレート(30個)400シリングで卸しているが、1人1日、5~10クレート買って行くそうだ。小売りの儲けは1クレート100シリングだから、1日10クレート捌けば1カ月では3000シリング以上になる。かなりの収入である。Eは現在3500羽のにわとりを飼っており、卵の生産は1日平均34.5クレート、純利益は8000シリングにも上る。にわとりが全部、成鳥になって卵を生めば2万シリングは堅いと予想している。現地の研究所の職員にこの話をぶつけてみたら、養鶏には5万シリングの元手が必要で、生活も満足にできない4000シリングの給与の身には、到底無理だという溜息まじりの答えが返ってきた。養鶏はにわとりが病気にかかり大量死する場合もあるのでリスクが大きい、乳牛飼育でミルクを売る方が得策だと言う人もいる。

一方、金さえあれば何でも買える、もっと金がほしい、どんな手を使っても手に入れるぞ、こうして誘惑に負け不正や悪事に走る人が増えている。公用車を無断で使

って人や物を運び、小銭を稼ぐドライバー、客から受け取った代金をポケットにしまいこむウェ이터、各種の許認可手続きに便宜を図り賄賂を要求する役人、営業免許のない行商人や露店商人を捕まえては罰金の名目で金を巻き上げる警官、公定価格よりもはるかに高い価格で売り、不当な利益を得る商人、政府や公企業の公共財産を盗む役人や労働者等々、不正、悪事を働く者の話題はうんざりするほど多い。

物を手に入れようと仕事に精を出し、経済活動が活発になるのは望ましいことだが、不正や悪事による蓄財を見逃せば、経済格差は広がり、真面目に働く者に失望感を抱かせ、経済活動が再び停滞することにもなりかねない。政府の舵取りは一層難しくなっていくだろう。

(ふるさわ・こうぞう/駒沢大学教授)

キノンドニ・マーケット

